

小学校教員の養成を主たる目的とし、2013年4月、学習院大学文学部に教育学科が新設された。教師、教育専門家は「教える専門家」から「学びの専門家」への転換が求められる中で、同学科は「学びの総合プロデューサー」の育成に尽力している。将来の教育に携わるプロフェッショナルを育てる教授陣の一人が岩崎 淳先生。丁寧で分かりやすい指導に定評がある岩崎先生が、国語科概説の授業で実践的教材として使っているのが、日本語検定委員会編の「ステップアップ日本語講座 上級」。その効果と、“言葉を大切にし、日本語を愛する人になってほしい”という願いをすべての授業に込めている岩崎先生の日本語に対する思いを伺った。



岩崎 淳 氏

学習院大学 文学部 教育学科 教授

### 教員の言葉の力が上がれば 児童の言葉の力も豊かになる

日本語力を磨く必要性に対し、岩崎先生は、“学生自身のため”、さらに、“学生から教わる児童のため”と、その理由を挙げた。

「国内、海外に関わらず、就職して日本語を全く使わない人はいません。また、教職に就く人も、そうでない人も、社会人として求められる力のひとつは言葉の力です。特に、小学校の授業は、国語科の授業が一番多いので、「体育や算数は得意けれども国語は苦手」という教員でも、国語科の授業を数多く持つこととなります。教員が、日本語について正確な知識を持つことは、教育者としての大きな支えになります。一方で、日々児童と接する教員は、児童の手本になることが求められます。言葉を正しく使うことができる、そしてそれ以上に、児童の手本となる言葉の力を身につけた人になってほしい、もっと大きく言えば、言葉を大切に、日本語を愛する人になってほしい、というのが私の願いです」

### 人間関係の構築には 日本語力が不可欠

授業や児童との対話だけではなく、ほかの教員とのコミュニケーション、あるいは保護者の前で話すなど、教員は言葉を発する場面が多く、日本語力も問われる。正しい日本語力を身につけるために岩崎先生が教材として選んだテキストが、「ステップアップ日本語講座 上級」。

「コミュニケーションの基本は言葉です。言葉の力を付ければ、コミュニケーションの力も高まります。対話の中では、自分の気持ちを適切に伝える力やスキルが必要です。熱意はあっても、適切な言葉を使わなければ、相手にはなかなか伝わりません。さらに、間違った言葉を使えば、それだけで軽蔑されたり、相手を怒らせたりすることもあります。人間関係を構築していくうえでも、日本語の力は重要な力の一つだと思います。また、授業では、敬語に時間を費やしています。敬語は使えると自信を持っていても、適切に使えるのは丁寧語だけという学生もいます。アルバイトやクラブ活動の上下関係で使っているだけで、明確に尊敬語や謙譲語が分かっているわけではありません。また、源氏物語などの古典の敬語と現代の敬語は異なっているので、それが混乱の元になり、敬語に苦手意識を持つ学生もいます。敬語は、社会人として必須ですが、テキストを読んだだけではすぐには理解できないこともあるので、学生に理解できるように、丁寧な説明を心がけています」

さらに、授業で学ぶ以外の日本語力を高める方法として、日本語検定を推奨している。

「英語を積極的に勉強する学生はいますが、日本語の勉強をする学生はあまりいません。日本語の力を向上させるためにも、日本語検定を受けることがひとつのきっかけとなればと思っています。また、日本語検定の勉強を通して言葉の力が付けば、文章を書いたり人前で話したりすることに対する苦手意識を払拭できるようになります。少なくとも、日本語検定●級を持っているということは、それだけの力があるということです」

### 正しい言葉遣いの中に 言葉の美しさは宿る

また、日本語力を高めるためには、なるべく良い表現に触れることも大事。岩崎先生ご自身も、日ごろから意識して五感が豊かになる表現に触れる機会を作っていると話す。

「良い本を読む、良質な講演を聴くなど、良いものに触れることを常々意識しています。良質な講演とは、内容だけでなく、言葉遣いの美しさも含まれます。言葉は、感染力が極めて強いものです。好ましくない言葉遣いだと思っていても、つい、発してしまって、自分でも愕然とすることがあります。その最たるものが流行語です。耳慣れない言葉に最初は抵抗があった人でも、頻繁に接しているうちに感覚が麻痺してしまいます。言葉は外から不意にやってきますから、100%防ぐことはできませんが、できるだけ汚染の度合いを少なくしたいと思います。そのためにも、質の高い表現に触れるようにしています」

言葉の感染力を危惧する一方で、美しい言葉の定義には確固たる思いがある。

「言葉の美しさは、言葉遣いの正しさの中にあると思います。絵画、あるいは演劇や文学では、正しくないものの中に美しさがあることもあります。言葉に限っては、不適切な言葉遣いの中に美しさはありません。くずれた言葉の中にはちょっとした面白さがあるかもしれませんが、正しい言葉遣いの中にこそ美しい言葉や日本語は存在するのだと思います。また、言葉遣いが乱れると、思考も乱れます。人間は、言葉を使って考えていますから、荒れた言葉遣いや乱れた言葉の中から、緻密な思考や豊かな感情表現は、生まれません。これからの日本を担っていく若い人たちには、改めて、母語である日本語を大切にしてほしいと願っています」

最後に、正しい日本語を守るための礎となってほしいと、今後の日本語検定に期待を込める。

「社会の中では、言葉はどんどん変化する方向に向かいます。だからこそ、その変化をゆっくりにすることが大切です。それは、言葉の変化が大きいとコミュニケーションができなくなるからです。高齢者と高校生の例で言えば、高校生同士の会話を聞いても、高齢者には何を話しているのか理解できないということがあります。両者の間に共通の言葉が無ければ、会話も成立しません。文章にしても、100年前に書かれた本をスラスラと理解できれば、時代を超えたコミュニケーションが可能となります。言葉の変化を緩やかにするためにも、日本語検定の果たす役割は大きいと思います。変化に理解を示し過ぎず、時代の流れに逆らって規範を示し続けてほしいと期待しています」